

教育実践総合センター事業の主な取り組み

本センターは、「教育」「研究」「社会貢献」の三分野における実践研究指導センターとして、教育インターンシップや教育実習等の支援を主に行う「学生支援領域」と、地域の教育関係諸機関や現職教員との連携の支援を主に行う「地域教育支援領域」について行っています。今年度から始まった教育実習の様子についても紹介します。

教育実習

学校現場での実習から多くのことを学びました

実習での授業づくりの経験を肥やしに、更なる成長を！

初等教育学科 教授 安野 功

私は、浦和市(現さいたま市)の小学校で17年間、教員を経験した。その間、指導教諭として様々なタイプの教育実習生を受け入れてきた。その中には、教師に向いているなどと思う学生もいれば正反対の学生もいた。けれども最終的には無事に実習を終え一人残らず教員になった。それが私の自慢の一つである。

そうした現場の指導教諭としての経験・実績をもつ私であるが、自分の教え子を実習生として母校の小学校に送り出すのは初めての体験である。途中でギブ・アップ。そうした学生が皆無であることを願いつつ、実習生を一人また一人と実習先の小学校に送り出した。

最初の訪問指導は5月26日(木)、さいたま市立辻小学校である。研究授業の教科は、私の専門の社会科。訪問当日、自分事のように緊張が走ったのを、今でも覚えている。けれども、“案ずるより産むが易し”。

大学の授業では見ることでできない凛々しい姿の緒方君が子どもたちと対峙していた。満面に笑みをうかべて…。教育実習の学びの成果の手応えを実感した瞬間だった。これは余談だが、緒方君の担当指導教諭は私が初任者の頃から体育関係の仕事をご一緒した隣の学校の先生。教頭先生は私と同じ学校で仕事を共にした後輩。さらには、実習校の辻小学校で私の娘が教育ボランティアとしてお世話になっていた。偶然がここまで重なるものか。これも何かのご縁である。そうした話題で、校長先生との談話が大きい盛り上がった。

ご縁と言えば仁木君が実習したさいたま市立大成小学校。その研究授業を拝見した教室に、私が2校目の学校で勤務を共にした先生の顔があった。遠藤先生である。その先生の国語の授業は天下一品。実力派ナンバーワンの先生であったが昨年春に退職。今は、大成小学校で初任者の指導教諭を務めているという。もちろん仁木君の社会科の授業も、なかなかのものであった。

そのほかの4人、里見さん、野田君、立浪さん、澤村君の研究授業もそれぞれすばらしかったが、中でも思い出深いのは澤村君の社会科の授業であった。単元は「むかしの道具とくらしの変化」。教育実習生の授業とは思えないほど見事な授業構成、そしてメリハリのきいた授業展開であった。それもそのはず。校長先生は理科が専門だが千葉大学教育学部附属小学校で鍛えられた強者。その直々の指導を何度も受け、授業づくりを通して厳しく叩かれ、そこから自力で這い上がったのである。

まさに“教師は授業が命”である。この言葉は私の座右の銘だが、教育実習での得難い授業づくりの経験・現場での学びを肥やしに、更なる成長を遂げてほしい。

10月から、初等教育学科3年生63名が教育実習を行いました。

10月以降の教育実習の内訳は以下の通りです。

東京都	8名	神奈川県	15名
埼玉県	11名	千葉県	9名
茨城県	2名	群馬県	3名
栃木県	3名	静岡県	4名
山梨県	2名	長野県	1名
新潟県	1名	富山県	1名
徳島県	1名	長崎県	1名
東京都(国立)	1名		1名

12月で全ての教育実習が終了します。教育実習の経験を生かして、3年生は次のステップに向けて動き出しています。

“授業を練り上げる” ～辛くもあるが、とても楽しい体験～

初等教育学科 3年 澤村 慶紀

4週間の実習では本当に多くのことを学ぶことができた。その中でも一番自分の経験知となったのは「授業力」だと思う。小学校の授業は今まで自分が考えてきた授業の形とは全く別物だった。

授業というと、どうしても“教え込む”イメージが強かったが、実際に現場に出ていざ先生方の授業を見てみるとそれは全く逆なのだ実感させられた。小学校の授業で求められるのは“子供たちが自ら発見する”過程をどれだけ組み込めるかにかかっているように思う。全日実習の後の校長先生のコメントの中に「教え過ぎ」という言葉があったことが今でも心に残っているのはそのギャップが大きかったせいだろう。

精練実習ではそのギャップを埋める事が自分の一番の課題だった。いかに子供たちの考えを引き出し、発見させ、それを発表へと導くことができるか。実習が始まる前から自分は社会をやろうと心に決めていたので、その中でもどの単元にするのか決める所でとても迷った。苦労の末、「昔の道具と当時の人々の生活」に決定した。

授業の中で子供たちの「発見」、「興味・関心」、「発言」を引き出すのに社会は最も適しているように思う。そのため教材として自分が選定したのは、当時の暮らしぶりの絵と実際に使われていた昔の道具である。まず当時の暮らしぶりの絵を提示し、現代の生活との違いを比較させるのが第一の授業の仕込み。これによって子供たちの反応を引き出し、発表の場を作ることができた。授業の最後に第二の仕込みである道具の実物を子供たちに見せることで、より興味・関心を引き出すことに成功したと思う。

実際の授業の中で一番苦労したのは板書と発問だった。子供たちの意見をクラスで共有するために板書はかかせなかったが、上手くまとまらず板書計画よりも書くことが増え、全体的なまとまりを出すのが難しかった。発問が最も難しいと感じたのも実習で得た教訓である。実習の最初の頃はただ単にその場の質問を考え、発問していた。けれども、自分が授業を作っていくうちに、何を目的として発問すべきかなど、行きつく先を考えた発問がいかに重要かということが、何となくではあるがつかめたように思う。

何度も担当以外のクラスにお邪魔して、最後の授業のために練習を重ねた。その結果今までの授業の中で一番納得のいく授業が精練授業で展開でき、自分の自信に繋がった。授業をいかに練り上げていくか。それを考えることは辛くもあるがとても楽しいものだ。そのことを体で学んだ実り多き実習であった。

授業をつくる楽しさ

初等教育学科 3年 渡瀬 将二郎

私は、4週間の教育実習を通して、何よりも一番に「授業をつくる楽しさ」を感じることができた。一人の先生として子どもたちの前に立ち、初めてやった社会科授業は、本当に緊張した。担任の先生が写真を撮ってくださったが、板書ばかり気になってしまい、そこには、子どもが発表しているときも黒板をじっと見ている自分がいた。このような反省を生かし、実習中は、授業を「教える」のではなく、「一緒につくっていく」というイメージを大切にし、児童に寄り添った授業ができるように心がけて、毎日の実習授業に臨んだ。

もちろん、納得のいく授業など一回もできなかったが、先生方の指導の下、どうすればよりよい授業を展開することができのるかを、自分なりに深く考え悩み、追究し、試行錯誤していくなかで、自分の中でも少しずつ進歩していく実感をもつことができた。

研究授業でやった体育の跳び箱では、子どもたちに少しでもうまくなった、成長したといった達成感や充実感を味わってもらいたいという願いから、跳び箱を8台使って段階的に6つの場を用意した。その結果、私が自分なりに精いっぱい考えて挑んだ授業を子どもたち一人ひとりが評価するかのようになり、「足をすばやく胸に引き付けるように意識したら、6段でかかえ込みが跳べたよ!」、「踏切を力強くしてやったら、初めて台上前転を成功させることができたよ!」、「跳び箱の授業がこんなに楽しいと思わなかった!またやりたいな!」と最高の褒め言葉をくれたときには、授業をつくる楽しさ、教師のやりがいと心から実感することができた。子どもたちが授業の振り返りを書いた跳び箱カードは、一生の宝物である。

私にとって、この4週間の教育実習は、絶対に忘れることのできないものとなった。正直なところ、私はこれまで自分を支え続けてきてくれた家族、たくさんのことを教えてくださった恩師に対する一つの恩返しという形で教師になろうと思っていた。しかし、この教育実習を通して、先生方に出会い、児童のみんなに出会い、かけがえのないものをたくさん手に入れることができ、他人のためではなく、自分のために教師になりたいと強く心に抱くことができた。

これからも、この気持ちを忘れずに、常に学び続ける姿勢を大切にしていきたい。

教育ボランティア活動

ボランティア活動、地域連携の活動です。

支えられるということ

初等教育学科 2年 山川 朋子



私は今年の春から新石川小学校で、インターンシップをさせてもらっています。インターンシップでは、特に特別支援学級と2年生を中心にクラスに入って、授業の補佐や子どもたちと触れ合う活動をしています。そんな縁から、小学校で毎年恒例の夕涼み会という地域も参加する大きいお祭りに参加することになり、そこで國學院のブースとし

てお店を出店させてもらうことになりました。

私は今年が初めての参加だった上に、お店の設営をすることにもなり、まず何から手をつけたらいいのか、そしてどう進めていけばよいかわからなくて、とても苦戦しました。一からモノを作ることの難しさを自らの身をもって感じました。

そんな中で、力になってくれたのは、先生方や友達、先輩でした。新石川小学校とは直接関わりのなかった人でも、私が誘った人たちはみんな快く仕事をし、協力してくれました。そして自分が思うようにいかなくて落ち込んだ時は、励ましてくれたり、相談に乗ってくれたりしました。そういった一人ひとりの心遣いがあたたかく、嬉しく感じました。自分がこんなに中心になって実行した経験は初めてだったので、こんな気持ちになれたのは本当に貴重な経験でした。

自分が思い詰まって辛くなった時、一人で抱え込むのではなく、人に助けをもらう勇気を持つということをこの経験と一緒に忘れないでおきたいと思います。

教育実践総合センター夏季講座

8月6日(土)、特別活動教育実践フォーラムを開催しました

8月6日(土)13:00から17:30まで、國學院大學「横浜たまプラーザキャンパス」において、「國學院大學特別活動実践フォーラム」が行われました。1号館講堂において全体会が、また各教室にて分科会が行われ、350名(各分科会参加者265名、文部科学省調査官2名、本学関係者8名、学生参加者80名)を超える参会者のもと、活気あるフォーラムとなりました。

まず、新富康央学部長の講話からスタートしました。「求められる『特活力』～豆腐づくりから、納豆作りへ」のテーマのもと、つながりの中で個を育てる大切さについて考える機会となりました。



また、鼎談では、コーディネーターの宮川八岐先生、登壇者の杉田洋先生(文部科学省初等中等教育局教科調査官)、城戸茂先生(文部科学省初等中等教育局教科調査官)、鈴木栄子先生(横浜市教育委員会)のもと、「望ましい集団活動を育てる学校力・教師力を求めて」のテーマについて、最新の情報を含め、学校現場で役立つお話を聞くことが出来ました。

思ひ草

國學院大學人間開発学部教育実践総合センターだより

第6号

平成23(2011)年11月30日 発行

『頑張ることを応援する』指導者に向けて

人間開発学部長 しんとみ やすひさ 新富 康央



10月23日、「第3回共有フェスティバル」が開催されました。雨天順延の運動会と重なり、どれだけの人たちが参加してくださるか、心配でした。しかし、今年は昨年よりも百名増えて、約7百名の参加でした。ボランティア学生たちも喜んでくれました。今年度は、サッカー元日本代表、北澤豪氏を招いてトークショーを行い、大好評でした。同時に、人々が関心を持ってくれたのは、学生達のさわやかな活躍ぶりでした。教師としては、これほど嬉しいことはありません。参加者から戴いたメールの一部を紹介しましょう。

「きょうはおかげさまで、あたたかく明るいキャンパスの雰囲気浸らせていただけてとても幸せでした。(中略)あのあと小さい子どもたちを遊ばせるイベントなどにもうかがって、改めて、なんてすてきな学生さんたちなんだろうと感嘆しました。たとえば、親子でゴム風船エクササイズしているクラスで、男子学生さんが『○○ちゃん、がんばったね～。そしてお父様のフォローがすばらしかった。みぎっ、ひだりっという

タイミングが絶妙でした』って、マニュアルに無い細やかな気遣いにあふれたメッセージを贈られていました。ごあいさつも、質問した時の受け答えも皆さん快活で、身につけていてとても自然でした。よきものにはすべて、無理が無いですね。」(原文のまま)

もう一つ、嬉しい話です。ある学生の教育実習先に挨拶に行った際、本学部の3つの指導理念(①「損在」を「尊在」に高める指導者、②「手当て」のできる指導者、③「頑張ることを応援する」指導者)について説明しました。その時、担任の先生が、うなずきながら言ってくださいました。「なるほど、だから、授業指導案づくりだけで精一杯なはずなのに、その中でも「気になる子」のお世話を良くしてくれたのですね」と。

教師としては、私たちが目指す指導理念に向けて学生達がどれだけ育っているか、心配なものです。「頑張ることを応援する」。そのような指導者に育って欲しいと、いつも願っています。

秋に健康体育教育を想う

人間開発学部 教授 木村 一彦



毎日新聞(10/6夕)に、専門編集委員の富重圭以子さんの『なぜ「体育の日」なのか』というコラムが掲載されていました。そのままに書かせていただくと『極めつきの運動音痴・・・で、小学校の先生の「逆上がりぐらい、なんで、できんかねえ」あきれた口ぶりは、いまも覚えている。なぜできないのか、知りたいのはこっちだ。「重いものを持ったことがないから、できないんだろう」と水を入れた二つのバケツを持って、立たされたこともある。』これが体育嫌いになった理由の一つだそうである。そして『子どもが進んで何度でもトライしたくなるような楽しい雰囲気と、体を鍛える「体育」でなく、遊びの要素を加えた「スポーツ」のおもしろさを子どもたちに伝えてほしい。』と述べています。

今日の「体育」は楽しさや喜びを感じる「体育」が目標に掲げられています。それでもスポーツ技能を高めることに主眼があり、健康との関わりは「保健」に多くをゆずられています。

私たちは食べる、動く、寝ることによって生かされ、人生の

価値観、目的のための行動の源としています。私は子どもたちには、動くことは生きることの必須条件であることの認識を持ってもらうことが大切だと考えています。それは好き嫌いの問題でなく、やらねばならないことなのだとすることを。

食べることについては「好き嫌いなく何でも食べましょう。でも食べ過ぎはいけません。きれいなものは工夫して美味しく食べましょう」といいます。運動も栄養と同じように「運動は毎日行いましょう。でもやりすぎはいけません。どうせやるなら楽しくやりましょう。どうすれば楽しく出来るか工夫をしてみよう。」です。

このような知識と個別的な実践力の涵養が「保健」だけでなく「体育」の根幹にもなければいけないと思います。小学生低学年に理屈から入るのは難しいですが、教師の意識の中に少しでもこの考えがあれば、先の先生と違って、子どもたちと一緒にその場で楽しさを工夫できるようになるでしょう。